

コロンブスのアメリカ海域 への航海について

浅見 実

★ クリストファー・コロンブスは有名な人物ではあるが、その一生についてわからないことが多いとされている。

その素性は、多分イタリア人であると断言をできるが、そのほかにも、カスティリヤ人、カタルーニャ人、ポルトガル人等々、さらに6から7か国を含めて、多すぎるくらいの説がある。というのは、十分な資料がないからだとされている。

通説では、生まれたのは、1451年の8月から10月の間、イタリア・ジェノヴァの近郊で生まれた。父親の仕事は機織りの職人であり、女房も手伝い、各地へ売り込みに行っていた。その他、葡萄酒の小売りも兼ねていた。コロンブスは、20歳ころから、羊毛の買い付けをしたり、いくらかの借金をしたりして父親の仕事に加わるようになった。そして、24、5歳のころジェノヴァの大手商家に雇われ、ギリシャのエーゲ海のキオス島で乳香樹の取引に関わったり、ジブラル海峡を越えて大西洋に乗り出したり、各地を航海をしていた。しかしながら1475年に、当時、戦争状態にあったフランスの艦隊より攻撃を受けて、彼の乗っていた船は沈没をした。泳いでポルトガルのラゴスまで行き、リスボンのジェノヴァ人居住区に移り住んだ。その後の数年間は、彼は船に乗り込み、イギリス、アイスランド、アイルランド等の北方の国々とも交易に関わっていたこともあるらしい。彼は、このころ、こう言われていた。『コロンブスは商人である。学があるわけではないが、非常に才智にたけており、世界誌の術をよくして、地図をつくるのがうまかった。』と。

コロンブスはポルトガル滞在中に大西洋の西回り航海の構想を持ち始めたという。大西洋の果てにはインドがある。大西洋を渡って直接インドに行けば、途中で危険なオスマン帝国の支配する陸路を通らないですむと。まだ、巨大なアメリカ大陸の存在は知られていなかった。

でも、西回り航路の実行には、莫大な資金が必要とする。ポルトガル王・ジョアン2世、イギリス王・ヘンリー8世、フランス王・シャルル8世等に援助を依頼したが、資金面等を理由にいずれも承諾を得られなかった。ところが、スペインのイサベル女王は、度重なる彼の熱心な申し出を応諾した。資金の大半をユダヤ系の改宗者、ジェノヴァ商人等が負担をして、彼は、1492年8月3日、スペインのパロス港より、小さな帆船のサンタ・マリア号他2隻の船で、総員90名くらいで歴史的な航海に乗り出したのである。そして10月12日に、バハマ諸島のひとつの『ウォトリング島』（原住民はグアナハニと呼び、彼はサン・サルバドル・聖救世主と名付けた。）に到着をした。彼はここが目指すアジアであると信じた。それどころか死ぬまで、4回にわたった航海で彼は到着したところはアジアであると。アメリカ大陸の存在は、彼の存命中にはまだ知られていなかった。

★ コロンブスの航海は1492年からの10年あまりにわたり合計で4回にわたった。

- **第1回航海** 自分の到着した島々の美しさをたたえ、新しい世界に接したその驚きと感嘆の気持ちであふれている。成功者であった。大歓迎を受けた。現地で得たわずかばかりの黄金、宝石類を女王に献上した。
- **第2回航海** 17隻の船と1500人の船員を率いて意気揚々と出帆するが、航海は苦しく、うまい結果は生まなかった。寄港先はキューバ、ジャマイカ方面であった。そこでは、船員たちは行き先々で現地の住民たちといざこざを起し大混乱となっていた。彼には統率ができなかった。それどころか、自分はいかに偉大なことをしたかという、自己宣伝ばかりをしていた。植民地でどんな仕事をすべきか、計画を語り事業家の意気であった。
- **第3回航海** トリニダード島に接近をして、南アメリカの大陸に接触をした。でも成果がなく、苦しい立場にたたされる。王室や世間から冷たい目でみられた。そこで、エデンの園を発見したとか、哲学的、瞑想的になってきた。
- **第4回航海** ホンデュラスからパナマ辺りの沿岸を航海した。やはり、成果がなく調子は暗く、宗教的、神秘的、黙示録的となり、神の試練に耐え困難な大事業をしなければならぬと本人は考えた。

★ コロンブスは企業家と預言者が奇妙に混ざり合った存在であり、「発見」を神の摂理のわざであったと言えよう。行った地で、黄金や宝石などの現世的な富に強い関心を示す一方で、すべての住民にできるだけ我らの聖なる教えを説くことに執着している。侵略者が宗教を口実に使ったということはない。

当時は、キリスト教では、終末思想の考えが広まっていた。救世主が現れることが求められていた。腐敗した俗世は終末を遂げる。だから急いで世界の人々に福音を説かなければならない。

イサベルと会うまでは、コロンブスは単に経済的事業として、ジパングやカタイ（中国）へ行くことしか考えていなかった。でも、敬虔なクリスチャンであるイサベルは、彼の西廻り航海の計画に、宗教的な色彩を与えた。そして本気になってその気になっていったと。

コロンブスの事業の目的は、単なる地理的発見や探検ではなかった。その航海の動機の奥底には、キリスト教会派に強く影響された、救世主を求める終末的な歴史観があった。

★ 彼の航海でのアメリカ海域への到着は、それまでこの大陸に住んでいた数百万人以上の人々の運命を大きく変えることとなった。

★ このレポートをまとめるにあたり、ブリタニカ国際大百科事典をはじめとして、いくつかの書籍を参照した。

増田義郎著 コロンブス 岩波新書

コロンブス・全航海の報告 林屋永吉訳 岩波文庫 他